

特集

SFCのいきもの



KEIO SFC REVIEW

TABLE OF CONTENTS

No. **81**

特集

02 SFCのいきもの

04 SFCで植物観察

中嶋 陽大（環境情報学部2年）

07 学生が拓く看護ビオトープ

中嶋 陽大（環境情報学部2年）

09 SFCで野鳥探索

西田 康平（環境情報学部2年）

12 一ノ瀬友博研究会

13 寄稿 SFCの自然環境と生き物

一ノ瀬 友博（環境情報学部長・教授）

14 SFCできのこ探検

和田 匠平（政策・メディア研究科修士課程1年）

16 SFCで昆虫探し

川上 仁之（政策・メディア研究科後期博士課程1年）

18 ウェットコテージの実験動物

黒田 裕樹（環境情報学部教授）

21 イータヴィレッジのヤギ

飯尾 美咲（総合政策学部2年）

ロプレスティ みさ（総合政策学部2年）

佐藤 翼（環境情報学部1年）

24 編集部員によるレポート 鴨池とカモ

連載

28 寄稿 わたしの推薦図書

No. 16 西川 葉澄（総合政策学部専任講師）

30 七夕祭取材記

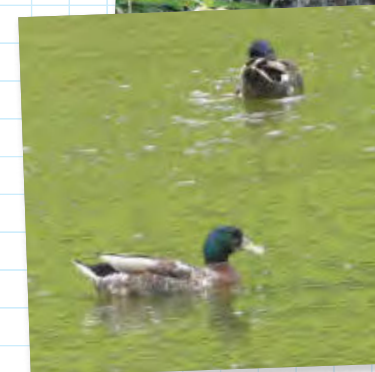
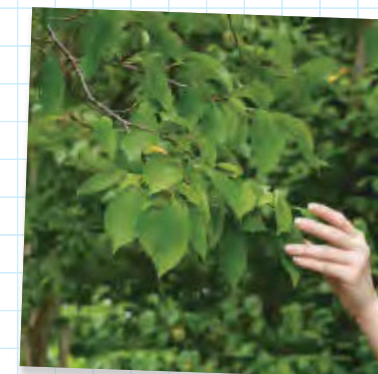
32 編集後記

2025 年 3 月、S F C は生物多様性の保全が図られている区域として、環境省によって「自然共生サイト」に認定された。

キャンパス開設から 35 年を迎えた今年、開設当初に植えられた木々はすっかり大きくなって、壮大な樹林を形成している。そして、鴨池と呼ばれるキャンパス南部に位置する遊水池は、S F C の豊かな自然環境のシンボルとして人々に親しまれている。鴨池のほとりで学生がサンドウィッチを食べていたら、トンビが飛んで来て、サンドウィッチが持っていかれたというのも有名な話だ。

そんな自然溢れる S F C には一体どのような生物が生息しているのだろうか？ 2025 年夏、キャンパスを歩きながら、生物の研究をする学生たちに S F C の植物、鳥、きのこ、昆虫を紹介してもらった。

また、自然環境の他にも、研究施設に暮らす実験動物や、学生寮に迎え入れられたヤギもいる。それらも含めて「S F C のいきもの」の実態に迫った。



S F C のいきもの

p. 24

鴨池とカモ



イタヴィレッジの
ヤギ

p. 21

ウェットテッジの
実験動物

p. 18

S F C で
昆虫
探し

p. 16

S F C で
きのこ
探検

p. 14

寄稿

S F C の自然環境と
生き物

p. 13

一ノ瀬友博研究会

p. 12

S F C で
野鳥探索

p. 9

学生が拓く
看護ビオトープ

p. 7

S F C で
植物観察

p. 4

SFCで"植物観察"

●自然共生サイト認定のキャンパス

——本日はよろしくお願ひします。自然共生サイトに認定された緑地とはどこなのでしょうか。

令和六年度後期に、SFC内の二十ヘクタールの緑地全てが自然共生サイトに認定されました。キャンパス内のちよつとした緑地に一歩足を踏み入れれば、そこも自然共生サイトとして認定されています。

SFCの森林の大半は、潜在自然植生（注1）の考え方を基にシ

ラカシ、アラカシといった常緑広葉樹の樹種で構成されています。

また、鴨池や浅間神社周辺などの一部には、キャンパス造成前の面影を残すクスギ・コナラの落葉広葉樹林があります。ちようど里山

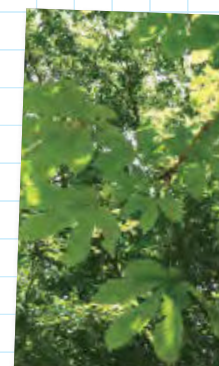
のような環境になっていて、たくさんの貴重な動植物が生息しています。鴨池のような水辺の環境に加えて、緑地の環境もありますから、SFCのような場所は、藤沢市全体で見ても、とても貴重です。

SFC造成前のこの土地は、シラカシ林、クスギ・コナラ林、スギ・ヒノキ植林が混在していたこ

SFCは、慶應義塾の他キャンパスと比べると豊かな自然に囲まれている。その生態系の調査と保全を一ノ瀬友博研究会で行っている中嶋陽大さんに、生物探索ツアーとして樹木の葉の紹介をしてもらった。



中嶋 陽大



とが分かっています。キャンパス造成に当たり、潜在自然植生に基づいて常緑広葉樹のシラカシが最も多く植栽されました。



シラカシ

また、シラカシと非常に似ている植物も生えていまして、それが

アラカシですね。皆さんにお配りした木の葉のサンプルの中にもあると思います。二つの葉の違いは鋸歯（注2）を見れば分かります。シラカシは鋸歯が全体に広がっています。アラカシは鋸歯が葉の上半分にしかありません。



シラカシ

アラカシ

次に、われらが鴨池の環境も見えていきましょう。鴨池の周りに目を向けてみてください。今もトンボが飛んでいますね。SFCの学生にとっては見慣れた風景かもしれません。これは実はすごいことなんです。というのも、トンボは水辺と樹林の両方がなければ生存できないからです。こうした環境はエコトーン（注3）と呼ばれており、生物多様性に大きく貢献しています。



●変わりゆく森とものさし

SFCの森は変化し続けています。例えば、藤沢市指定の環境状態を示す指標種のひとつとしてヤマトタマムシがあります。その数は、二〇二五年に入ってからキャンパス内で急増しました。今年は森林内の環境が非常に良い状態であることが示されたわけです。ですが、数が増えたことを喜んでい

るだけでは駄目で、なぜ昨年まではヤマトタマムシの数が少なかったのか、ということも考えなければなりません。SFC内の森林の変化を踏まえながら、来年以降も継続的に調査していく必要があります。



ヤマトタマムシ

●人が育む共生の森

マテバシイの木は、キャンパス内で浅間神社の近くにしか生えていません。葉は硬くて、先端になるにつれて膨らんでいくのが特徴です。また、秋に大きなどんぐりが実ります。



マテバシイの葉

さて、ここから見える左右の景色を比較してみてください。

右側に見える森は、今年間伐が行われました。間伐とは樹木の枝を切って森に光を取り入れる作業ですが、それによって草本層にまで光が届くようになり、生物多様性が大幅に回復しました。という



ケヤキの木

鴨池の周りに生えている木はケヤキですね。
この木はあまり横に枝を広げず、上へ上へと伸びます。そのた



キャンパス西部の樹林

左を向いた時に
見える景色



右を向いた時に
見える景色

のも、SFCの森は面積が広いため、全て自然のまま放置すると鬱蒼としてしまいます。先ほどお話ししたように、SFCでは、潜在自然植生に基づいて自然の森が作られています。けれども、生物多様性保全のためにあえて人の手を加えることもしています。

ですが、緑地管理には難しい面もあります。間伐によって侵略的外来種が増加してしまうことがあるのです。例えば、セイタカアワダチソウは草丈が高く、かつ繁殖力がとても高い外来種であるため、在来植物との光を巡る競争に打ち勝ち、その成長を阻害してし



まいます。しかも、ただ抜けばよいものでもなく、抜いたセイタカアワダチソウをその場に放置すると再生してしまつたため、焼却処理をしなければなりません。この植物は非常に生命力が強く、数が膨大ですから、管理が難しくなっています。

●生物多様性と人間の暮らしやすさ

自然には、鳥害や虫害といった生態系デイスサービス(注4)もあります。他方で、自然は人間に様々な恵みを与えてくれます。緑地がないと心の安らぎが得られなかったり、子どもたちの交流の場がなくなったりしてしまう。だから自然は絶対に必要なんです。

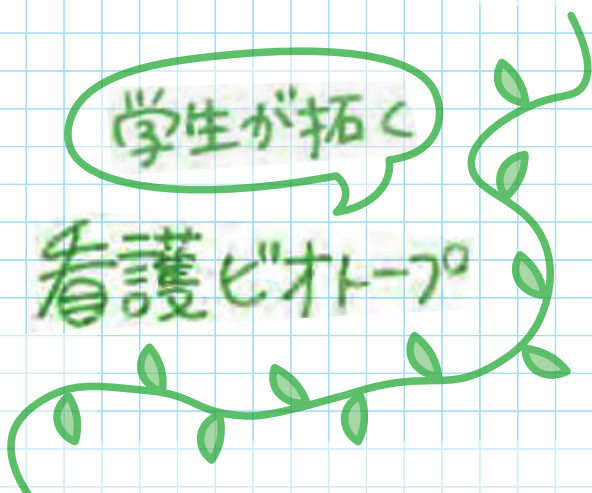
私が重要だと考えているのは、SFCで実践しているように、ある場所にもともとあった生態系を再現することです。キャンパスにはある程度人が往来していて、森

林を管理する機会があります。このように人間が作った森林は、人間が管理を引き継いでいかないと、災害などが起きた際、人に危害を加えます。そのため、目の前の森林の管理を怠らないことがとても大切になります。生態系と人間の関係は昔から議論されており、明確な答えを出すのは簡単なことではありません。それでも私たち一ノ瀬研究会では、SFCの人間と自然の適切な関係性を構築していきたいと考えています。それに、どのような関係が適切かということも、常に問い直していかなければなりませんね。

(構成：高坂真優佳)
※中嶋さんのインタビューは次ページに続く。

中嶋 陽大 (なかじま・ひなた)

環境情報学部2年。
一ノ瀬友博研究会所属。



ビオトープとは、ギリシャ語の「bio」(生命)と「topos」(場所)を組み合わせたドイツ発の用語であり、多くの生き物が生存可能な場所のことを指す。2001年、看護医療学部の設立と同時に看護ビオトープは作られたが、継続的な手入れの難しい時期が長く続いた。しかし2015年から現在まで、一ノ瀬友博研究会が主体となって管理を行っている。その主要メンバーである中嶋陽大さんに引き続きお話を伺った。



看護ビオトープ内には一本の細い河川が流れており、そこにはたくさんの生き物が生息しています。また、ハンノキ人工林、クヌギ・コナラの二次林(注1)、スキなどの草地といった複数のタイプの環境が隣接しています。このように、看護ビオトープでは多様な種が共存しています。そのため、同じキャンパス内であっても、鴨池がある方面とはだいぶ違った環境が広がっています。

二〇一五年に一ノ瀬友博研究会は、看護ビオトープを管理するために看護ビオトーププロジェクトを立ち上げました。そして現在では、SatofC (Satoyama Fujisawa Campus) プロジェクトとして看護ビオトープ内の生物調査と管理作業に重きを置いて活動しています。

看護ビオトープ内の管理作業は決して楽なものではありません。ここにはオオブタクサという侵略

的外来種が多く生えています。夏になると人間の身長を優に超え、一面に勢力を広げてしまっています。オオブタクサ自体は簡単に抜くことができ、そのまま捨てても再生しません。しかし、除草剤が使えず手作業で抜いていかなければなりません。さらに、根気が求められます。さらに、今年全てを抜いたからといって来年生えてこないという保証もありません。オオブタクサは数十年単位で種が眠るといわ

れています。完全に根絶させるには長期間抜き続けなければなりません。こうした積み重ねの結果、現在ではオオブタクサの密度が低くなつていて、私たちの努力が実つたと感じています。

こうした侵略的外来種は、もともとそこにあった生態系やパワーバランスを壊して、本来いるべきはずの在来種が生きづらい環境を作ってしまう。だからこそ管理作業は、潜在自然植生の再現を

- 注1 潜在自然植生…人間による自然への干渉を取り除いた気候や土壌条件の下で成立すると考えられる植生。
- 注2 鋸歯…植物の葉の縁にできるノコギリ状の切れ込み。
- 注3 エコトーン…陸域と水域、森林と草原など異なる環境が連続的に接する移行帯のこと。
- 注4 生態系デイスサービス…生態系が人間にもたらす負の影響や損失のこと。

目指すSFCにとっては不可欠な
のです。

除草剤を使って根絶させればよい
のではないか。そう思われるか
もしれません。しかし、侵略的外
来種のみ効果がある除草剤は今
のところ存在しません。それに加
えて、そうした除草剤を使うと、
在来種がさらに減少してしまうか
もしれません。人間が破壊した自
然を修復するためには、とても多
くの時間と労力が掛かります。繊
細な自然を大切に守っていく。そ
のような活動を目指して、私たち

は日々管理作業に励んでいます。

●一ノ瀬研が行うもうひとつのプロジェクト

自然循環を図るという目的で、
バイオマスプロジェクトという
ものも同時並行で行っています。
キャンパスの森林を管理するため
に行う間伐は、枝の処理に高額な
費用が掛かってしまっています。そ
のため、伐採した枝を炭にしてカー
ボンクレジット（注2）として発
行することを目指しています。ま

た、その灰をオコメンプロジェクト
（注3）の畑の肥料として提供
しています。私たちのSFCは、
人間と自然が共生する場所です。
バイオマスプロジェクトの活動
は、このようなSFCを持続可能
なものとして維持していくために
欠かせません。

（構成：高坂真優佳）

注1 二次林…天然林が伐採や火災な
どで失われた後、自然の力や人

の手によって再成した林。

注2 カーボンクレジット…温室効果

ガスの排出削減量や吸収量を、
企業間などの取引が可能な形
にした権利のこと。企業などは
カーボンクレジットを購入する
ことで、温室効果ガスの排出量
をオフセット（相殺）すること
ができる。

注3 オコメンプロジェクト…現在は
和田直樹先生（環境情報学部准
教授）の研究会が主体となって
活動している、米作りのプロジェ
クト。



除草作業の様子



●SFC全体の鳥類相

— SFCでは、どのような種類の
鳥が見られますか。

SFC中高の雑木林や鴨池の横
にある森など、落葉広葉樹が数多
く生えている場所には、多様な鳥
がたくさんいます。たとえばタカ
の仲間やオレンジ色の可愛いヤマ
ガラという小鳥、春と秋にはオオ
リリやキビタキという小鳥などが
見られます。それから、池の周り
の植物が生えている場所には、海
辺や河川敷に生息するシギがいる
こともあります。「漁夫の利」と

自然豊かなSFCでは、キャンパ
スに数多くの鳥がやって来る。そ
の実態はどのようなものなのだろ
うか。一ノ瀬友博研究会に所属し、
「鳥の生まれ変わりを自称してい
ます」と述べるほど鳥を愛する西
田康平さんにお話を伺った。



西田 康平



ヤマガラ

把握することが出来るわけです。

●SFCは鳥たちのオアシス！

SFCでは年間で百種類ほどの
鳥が観察できます。東京と神奈川
で見られる鳥の種類の約半分が見
られるのです。それには看護ビオ
トープの近くにある川などの湿地
の環境や、鴨池とその周りの草原
の環境などが関わっています。ま
た、キャンパスとその裏手にある
畑や田んぼとの間には、いくつか
の林がモザイク状に点在していま
す（注）。この場所も意外と大事

キビタキ



シギ（クサシギ）

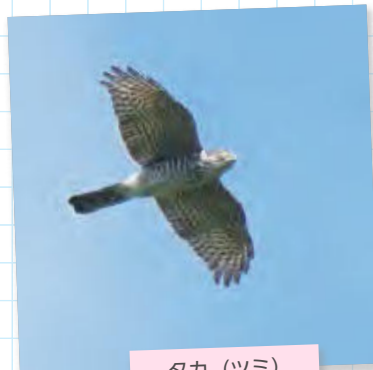




SFC裏手のモザイク状の環境（林）



ギャップ



タカ（ツミ）

です。このように、キャンパスという限られた広さの土地の中に、いろいろな環境が、いいところ取りをしたかのように集まっているんです。

また、鳥は環境の変化にとっても敏感です。木が一本切り倒されただけでいなくなってしまう鳥もいます。例えば、森の中で大きな木が切り倒されると、そこにギャップという穴ができてしまいます。このギャップができると、タカなどは餌となる獲物を見つけやすくなります。そうすると、小鳥たちは、タカの餌食になることを避けて、森に來なくなりやすくなります。このような現象も含めて考えていかなければなりませんから、生態系を維持するための作業はとても大事なことです。

さらに、看護ビオトープの裏にある公園の周りの森は、タカが渡って来るだけでなく、休む場所にもなっています。翌日の渡りに備えて、前日の夕方からタカが一

休みしているんですよ。ちょうど高速道路のサービスエリアのようになっているわけです。

●夜のバードウォッチング

今まで、夜に鳥を観察する際は、目を凝らして気合いで行っていました。しかし、今年から機材を導入できたので、観察の仕方も変わりました。

まず重要なのが、ナイトスコップです。自衛隊も使用している物ですね。これは、赤外線でも暗い場所を明るく映して、暗闇でも物体の位置や動きを視認できるようにする機械です。

それから、記録の質を上げるために、ライトを使うことも大切です。ところが、野生動物はライトがすごく苦手なんですよね。そのため、赤いセロファンを貼るなど、いろいろと工夫をしています。そうすることによって、見やすいながらも、鳥にストレスを感じさせ



一ノ瀬研で使用するナイトスコープ



一ノ瀬研で使用するライト



フクロウの羽根



ガビチョウ



コジュケイ



アイガモ

ずに観察できるのです。また、鳥の鳴き声を聞くことも必要不可欠です。昼のバードウォッチングも、七、八割は声によるものです。ですが、夜になると、鳴き声に頼る度合いが九割以上になります。例えば、フクロウの羽は特殊な作りになっていて、全く音がしません。なので、耳を澄ますことが重要になってきます。

●SFC周辺の外来種問題

SFCにおける外来種問題は本当に深刻です。植物はわりじわりと広がっていますが、鳥の場合、飛んで来た瞬間に、すぐさま影響を及ぼします。外来種の鳥の中には、もともと生息している鳥の卵を食べてしまうものがあるためです。

この辺りには、ガビチョウやコジュケイといった外来種がいます。これらは今の在来種の個体数に匹敵するくらい増えてきてい

ます。ガビチョウはジメジメとした藪の環境を好み、そこにいる在来種を追い出しています。キジの仲間であるコジュケイも、餌資源を巡って在来種と競争する可能性が指摘されています。そのようなことがあると、在来種が途絶えてしまう場合もあります。鴨池で、頭が緑色のカモを見たことはありませんか。あれはアイガモという種類の鳥です。アイガモは、本来の種類と別の種類を交配して作られた人工の家禽種（かきんしゅ）です。アイガモはかわいらしいですよ。でも、良いことばかりかというと、そうとも言えません。在来種のカモが子孫を残す機会を減らしたり、野生のカモの餌までも食べてしまうことがあるからです。

※写真は全て西田さんによる提供。
（構成・宮田智華）

注 モザイク状の環境…様々な種類の環境がパッチワークのように入り混じっている状態のこと。

西田 康平
（にしだ・こうへい）

環境情報学部2年。
一ノ瀬友博研究会所属。

寄稿 SFCの自然環境と生き物

藤沢市には、三大谷戸と呼ばれる良好な自然環境が維持されている場所が存在するが、SFCに隣接する遠藤笹窪谷はその中でも最大の規模を有する。SFCの設置にあたって行われた自然環境調査の報告書によれば、かつては雑木林や畑が広がる典型的な里山環境であった。キャンパス造成後には、現在の気候条件の下に成り立つ潜在自然植生の考え方に則り、シラカシやアラカシ、スダジイといった常緑広葉樹がキャンパスの外縁部に植栽された。

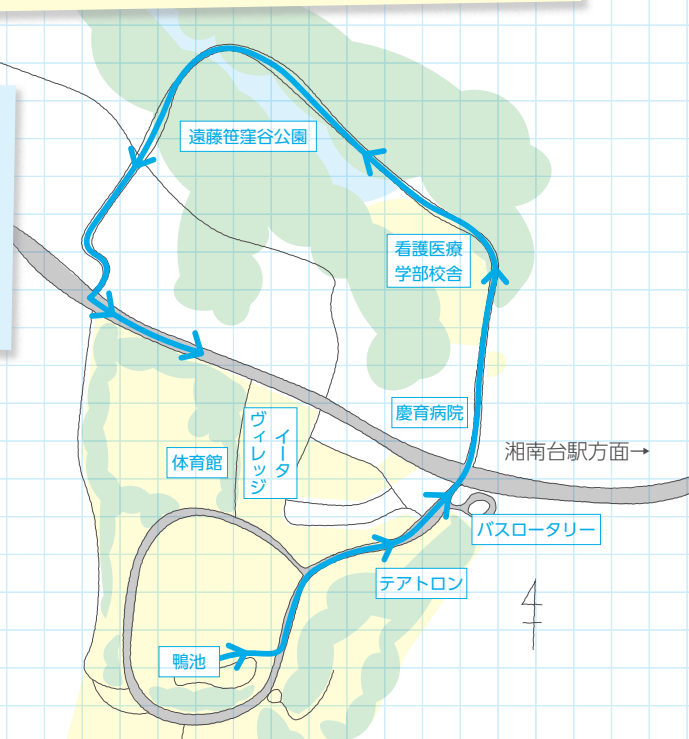
SFCには多くの動植物が生息している。お馴染みのカモはアイガモといって野鳥ではないが、鴨池には冬になると数多くのカモ類が北から渡ってくる。遠藤笹窪谷も含めるとこれまでに100種以上もの野鳥が記録されている。また、ニホンノウサギやホンダヌキといった哺乳類も生息していて、ホンDIGツネやアナグマも記録されている。一方で、特定外来生物に指定されているアライグマが数多く生息しているのも事実である。

この豊かな自然環境を授業でも活用していて、「生態学フィールド調査法」、「エコロジカルデザイン」といった授業ではフィールドワークを行っている。必修の「環境情報学」の初回では、SFCの中で採集した葉っぱを全員に配布し、その種名を調べ、キャンパスのどこに植栽されているものか考えるグループワークを課している。

最後にSFCとその周辺の自然環境を堪能できる散歩コースを紹介しよう。鴨池からスタートしてテアトロンを覗きながらタロー坂を下り、バスロータリーまで出る。横断歩道を渡り、看護医療学部の校舎の横を通り遠藤笹窪谷公園に入る。公園を抜けてさらに谷戸の奥に向かい、谷戸の湿地を横切る道があるので、そこを歩いて森の中に入る。樹木のトンネルのような道を抜けると住宅や畑がある高台に出る。そこから体育館が見えるので、坂を下りてイータヴィレッジの裏に行こう。ゆっくり歩くと小一時間の散歩となるが自然環境の変化に富み、いろいろな発見があるだろう。

一ノ瀬 友博 (いちのせ・ともひろ)

環境情報学部長・教授。
専門は、景観生態学、環境学、農村計画学。



< <https://scrapbox.io/Ichinose-lab/> >
一ノ瀬友博研究会HP

一ノ瀬友博研究会

多様な生態系が息づくSFCでは、その価値を未来に繋ぐための取り組みが数多く行われている。SFCにおける自然保護の第一線で活動する一ノ瀬友博研究会を紹介する。

活動内容

一ノ瀬友博研究会では、一ノ瀬友博先生の指導の下、生物多様性の保全とより良い都市環境の創造を目指し、様々な活動を行っている。2025年3月、SFCの森林は環境省により自然共生サイトに認定されたが、一ノ瀬研究会もその達成に大きな役割を果たした。

また、昨年11月のSFC万学博覧会2024では、ORF（オープンリサーチフォーラム）の一企画として、新たな取り組みである「SFC生物探索ツアー」を実施。2025年も実施が予定されている。このツアーに参加すると、実際にキャンパスの生き物を見たり触れたりして、自然と共生するSFCの在り方を学ぶことができる。

< <https://scrapbox.io/newstudent-sfcbiotop/> >
SatoFC プロジェクト紹介ページ



看護ビオトープ調査の様子



里山の管理作業の様子

< <https://x.com/kangobiotop/> >
Xアカウント @kangobiotop



2024年の生物探索ツアーの様子

生き物を見たらここへ連絡！

一ノ瀬友博研究会のSatoFCプロジェクトでは、看護ビオトープの再生に向けた調査や、SFC周辺の里山の管理作業を行っている。SatoFCプロジェクトのXでの投稿を見ると、普段の調査の様子が分かる。

「皆さんの目が、生き物や環境の保全には欠かせません。読者の皆さんも、SFC周辺で動物や植物を見かけたら、このアカウントに連絡してください！」（中嶋陽大さん）



SFCで"きのこ探検"

●きのこに魅せられた幼少期
—きのこの研究をしようと思っ
たきっかけは何ですか。

まだよちよち歩きだった頃、毎日遊んでいる公園に突如きのこが大量に発生しており、驚きました。それからきのこがあるたびにずっと眺めるようになり、きのこをだんだんと好きになりました。

●きのこを探してみる
—きのこは湿っている日陰に生えるイメージがあります。

傾向としては間違いなく日陰で湿っている所に多いのですが、有機物があればどこにでもきのこはあるんです。

きのこではありませんが、菌類はもう何個か見えてきましたね。

自然豊かなSFCでは、どんなきのこが見られるのだろうか。黒田裕樹研究会に所属し、きのこの研究をする和田匠平さんと一緒に、SFCできのこ探検をした。



和田 匠平

Lamda angustispora
ランマオア・アングスティスボラ



Ganoderma sichuanense
マンネンタケ



Dimeraria appplanata
コフキメダルチイ

▷木にたくさんさん付いている、緑色にも見える白い部分がコフキメダルチイ（別名コフキデリナリア）という種です。菌類と藻類が細胞外で共生したもので、地衣類と呼ばれる、きのこと同じく菌類の間



Annulohyphoxylon truncatum
クロコブタケ

▷この落ちている木の枝に発生しているのは、硬くて黒いこぶ状のきのこです。木を分解するきのこで、木がきちんと土に戻るよう

▷大型で肉質のきのこですが、食毒不明で、現時点では和名がありません。基本的に夏場のきのこですが、今年は雨が少なく、良いコンディションではありませんでした。それでも、辛うじて降った雨のおかげで、このきのこが生えたのです。でも、もうミイラみたい

—きのこは秋が一番生えやすいと思っていました。



Trameles orientalis
フジタケ

間違いではありませんが、きのこの種類や本数としては夏場の方が多いこともしばしばあります。梅雨明けの頃は特に増えますね。マツタケなど日本で馴染みのあるおいしいきのこは秋に多く生えるため、秋のイメージがあるのかもしれない。

解する菌の一種です。本種は、裏側がスポンジ状の種が大半を占めるイグチ科 (Boletaceae) のきのこを専門に寄生します。



Ganoderma australe
オオミノコフキタケ

選ぶのが難しいですが、沖縄などの亜熱帯、もしくは砂浜に生えるきのこがとても好きです。特に、砂浜のきのこではキシボウズタケ属が好きですね。卒業プロジェクトで研究したきのこで、キシの実に似た見た目も面白く、愛着が湧きます。

(構成…石田百花)



Pycnoporus coccineus
ヒイロタケ

▷食毒は不明ですが、硬くて食べられないでしょうね。いわゆるサルノコシカケの仲間です。染料に使うことができます。



Hypomyces chrysospermus
アワタケヤドリ(不完全世代)

▷古くなったきのこに寄生して分

—和田さんの推しきのこは何ですか。

和田 匠平 (わだ・しょうへい)

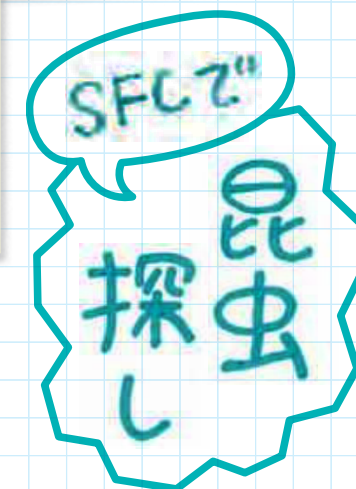
政策・メディア研究科修士課程
1年。黒田裕樹研究会所属。



Tulostoma sp.
キシボウズタケ属の一種
撮影：和田匠平
(和名および学名の再検討のため論文執筆中)



●昆虫マニアになるまで
—— 虫を研究し始めたきっかけは
何ですか。



どこでも虫に出会える、自然豊かなSFC。今回は、昆虫に詳しい川上仁之さんに、SFCで昆虫を紹介してもらった。



川上 仁之

でいます。また、学部生の時は、マイマイカブリの越冬地を明らかにするために、個体に発信機を取り付けて行動を追跡しました。

原点をたどると、保育園に通っていた頃に流行した『甲虫王者ムシキング』というゲームです。それにハマリ、カブトムシとクワガタの飼育を始めたのがきっかけです。実家に虫のブリーディングルームがあり、今は四五百匹ほどいます。SFCで捕まえた個体もいますし、海外から輸入した

個体もいます。最近、カブトムシとクワガタ以外の飼育もするようになった。朝起きたら、まず虫に餌をやります。これがルーティンになっているぐらい、虫中心の人生を送っています。

——好きな虫は何ですか。

やはり、ヘラクレスオオカブトですね。リーゼントみたいな毛の生え方が好きなポイントです(笑)。これは家で卵から育てた個体で、もう二歳になります。

——現在は、どんな研究をされていますか。

樹液を利用した、虫の種類を特定する研究を行っています。数年前、僕は環境DNA(環境中に残存した生物由来の遺伝子)が樹液に含まれているのを発見しました。この環境DNAを採取して分析すると、樹液を利用した生き物を特定することができます。現在、この研究成果の論文文化に取り組ん



ヘラクレスオオカブト



マイマイカブリ

●SFCの虫について
——SFCにはどんな虫がいますか。

これまで四百種前後の昆虫種を一ノ瀬研究会で確認しています。



飼育するクワガタ

自然豊かなSFC周辺には、希少種も生息しています。研究会の先輩で、寄生バチの新種を発見した人もいます。

SFCの特徴は、まず、里山環境を好む昆虫が数多く生息していることです。里山とは、ある程度人が手入れしている自然環境のことです。また、水生昆虫、特にトンボの種類の多さも特徴的です。トノサマバツタや蝶もたくさんいます。さらに、SFCは在来種のカマキリの楽園です。最近、日本で外来種のカマキリが増えていますが、SFCではまだ確認されて

——SFC周辺では、季節ごとにどのような虫が見られますか。

いません。

春には、ヤマサナエという黄色いトンボが見られます。僕はヤマサナエの色が好きです。夏は、やはりカブトムシやクワガタが外せません。七、八月の夜にSFCを歩いていると、カブトムシが街灯の下に落ちていたりします。また、カブトムシとクワガタは、良い樹液を出す木がある、浅間神社の近くでも見られます。樹液の有無を判断する手掛かりは、甘ったるい、お酒のような独特な匂いです。

夏の終わりには、クスサンという蛾や、ムネアカセンチュウガネなどを見ることが出来ます。夜にSFCを歩いていると、街灯の下に止まっていることもありますね。秋にはトノサマバツタやコオロギ、アカアカネなどが見られます。トノサマバツタは、看護医療学部

——虫が嫌いな人に対してアドバイスはありますか。

校舎の近くにいます。冬にはフユシヤクという蛾が見られます。このように、虫は一年を通して出現期間が決まっています。そのため、久々にその虫を見たら、一年ぶりに友達と会ったような感覚になります。

まず、寛大な心を持つことが大事です。地球上に虫がいないと、私たち人間は生きていけません。私たちが人間は生きていけません。農作物はうまく実らないし、家畜の餌となる草も育ちません。何よりもこの事実を知っていただきたいと思います。また、実際に虫を飼育することも大切です。最初はかわいくないと思っても、世話をしているうちに少しずつ愛着が湧いてきますよ。初心者の方には、カブトムシやクワガタが飼いやすぐお薦めです。

トノサマバツタ



ノコギリクワガタのオスが、樹液を巡って戦っているのを発見!



川上 仁之
(かわかみ・ひとし)

政策・メディア研究科後期博士課程1年。
一ノ瀬友博研究会、黒田裕樹研究会所属。

ウェットコテージの実験動物

●発生生物学への道

——黒田先生の研究室ではどのようなことが研究されていますか。

私の研究室は、発生生物学を専門としています。発生生物学とは、卵からどのように生物が形成され、形づくられていくのかを研究する学問です。特に、実験動物としてアフリカツメガエルというカエルを用いて研究を行っています。アフリカツメガエルは、卵を非常に多く産むこと、温度を一定に保つことにより通年産卵が可能なこと、そして観察が容易であることから、実験生物として適しています。

私が発生生物学を志す中で、高校生の頃に人体に関するテレビ番組

SFCには、自然環境に生息する生物の他に、実験動物も暮らしている。キャンパス東部にあるウェットコテージでは、アフリカツメガエルをはじめとする様々な生物の研究が行われている。ウェットコテージとドライコテージで黒田裕樹先生にお話を伺った。



黒田 裕樹



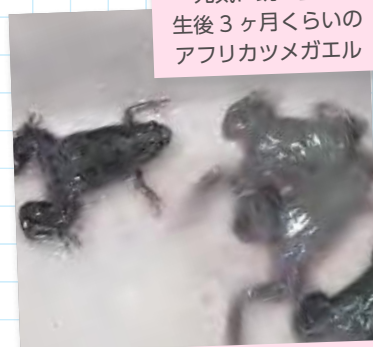
2歳半くらいのメスのアフリカツメガエル

組を見たのはひとつの大きなきっかけでした。生物の内部にも宇宙のような広大な世界が広がっていることに魅せられたのです。三十八億年の生命の歴史の中で、ひとつの細胞からどのように複雑な生命体へと移行し、今日の私たちのように思考し会話する存在へ至ったのか。そのメカニズムの一端を明らかにしたいという思いが原動力になりました。その流れから、進化にも強く興味を持つようになりしました。

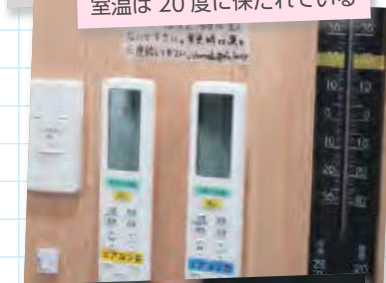
生物の進化は数万年単位の時間を要することが多いため、それを実験で再現するのは現実的ではありません。しかし、個体形成の過

程には進化の歴史が刻まれていると考え、発生という現象に着目して研究を行う道を選びました。特に関心を持ったのは、ヒトを含む脊椎動物です。なぜクジラや恐竜は巨大になったのか、なぜヒトは直立二足歩行ができるのか。その根幹には脊椎の存在があります。そして、学問を突き詰めていくと、脊椎の前段階に当たる脊索(せきさく)という

元気に跳ね回る生後3ヶ月くらいのアフリカツメガエル

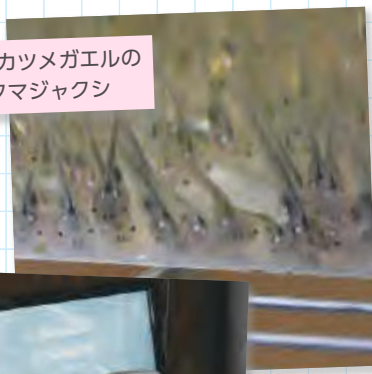


室温は20度に保たれている

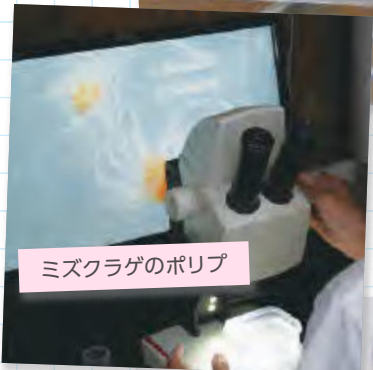


組織が重要であることが分かってきます。この脊索がどのように形成されるかを調べるには、卵が変化していく過程を観察する必要があります。脊椎動物を実験に用いるに当たり、アフリカツメガエルは、一度に産む卵の数が圧倒的に多く、卵の一部を物理的に切り貼りしてその後の変化を調べる「胚操作」という実験が可能な点において、昔から唯一無二の選択肢として選ば

アフリカツメガエルのオタマジャクシ



ミズクラゲのポリプ



アカハライモリ



れてきました。

また、私の研究室ではアフリカツメガエル以外にも様々な生物の研究が行われています。キノコに魅せられた学生、クマムシやクラゲの研究に没頭する学生、あるいは自宅で数百匹のカブトムシを飼育する学生もいます。それぞれが「好き」という強い気持ちを原動力に研究に取り組んでおり、私と同じように特定の生物に強い好奇心を持つ学生が非常に多いと感じています。

——実験には、どの発生段階の個体を用いているのでしょうか。

使用する発生段階は実験の目的によって異なります。脊索などが作られる初期発生の研究では、受精直後から、神経が動き始める頃までの胚を主に用います。オタマジャクシは、遊泳行動やカエルへの変態過程の研究に用いられます。成体は、薬剤を投与して肺炎誘発モデルをつくり、病気のメカニズムを調べる研究に使用します。また、研究の源となる卵を得るためにも、成体はもちろん不可欠です。このように、未受精卵から成体まで、学生の研究テーマに応じて様々な段階の個体を使い分けています。

●命を扱うということ
——実験動物を用いる研究において、SFC全体、もしくは黒田研究室では、どのような倫理的ガイドラインが設けられていますか。

前提として、生物学者は特定の生物種だけでなく、生物全体を愛し、尊重する視点を持っています。そのため、動物実験に関する倫理を問われると、生物学者はしばしば戸惑うことがあります。なぜなら、多くの人が「動物」と聞いて想起するのは、哺乳類に偏っているからです。実際には、動物界には三十五の門が存在しているのに、その中のひとつの門のさらには七つある綱のひとつである哺乳綱(哺乳類)のみが「動物」として語られてしまう傾向があります。動物倫理の議論は、動物界全体から見ればパーセントにも満たない範囲について行われているのです。そのため、生物学者の立場からは「もっと全体を俯瞰す

ることが必要ではないか」と感じることがあります。

もっとも、人間社会では「人の視点」に立ってルールを設け、遵守する必要があります。そのため、実験動物の扱いについても、社会的要請に応える形で厳格なルールが設けられています。まず、慶應義塾大学では、実験動物を使用する学生は研究倫理に関するオンラインのガイダンスコースと、医学部が主催する実験動物講習会を受講し、試験に合格しなければなりません。さらに、SFCには研究倫理審査委員会があり、ガイドラインで定められた実験を行う際には、計画書を提出して、審査を通過する必要があります。

私の研究室では、これらに加えて独自の方針も設けています。新しく研究室に入る学生には飼育に関するガイダンスを行い、特に三つの点を徹底しています。(一)研究目的が明確な実験にのみ動物を用いること、(二)実験に必要な

な最小限の数を見極めて使用すること、そして(三)動物に苦痛を与えない方法を徹底することです。また、実験動物への感謝の気持ちを忘れないために、定期的にかエルが祀られている神社に参拝に行きます。最近では岐阜県下呂市の加恵瑠神社、その前は三重県の二見興玉神社などで供養を行いました。これは日本の研究室ならではの文化かもしれませんが、命を扱うことへの敬意を示す大切な取り組みです。

●SFCの生態系が持つ力

—SFCは自然共生サイトに認定されました。どのような点が評価されたのだとお考えですか。

藤沢市のように都市化が進む地域で、大学の敷地というバリアによって豊かな自然が守られていること自体が大きな価値です。さらにSFCでは、一ノ瀬友博研究室を中心に、高度な技術を用いた環

境モニタリングが継続的に行われています。教員や学生が分野の垣根を越えて協力し合う文化もあるため、これまでになかった新たな自然環境の評価方法などが生まれる可能性を秘めている点も高く評価されたのではないかと考えています。大学の敷地内であるため、地権者の許可を気にせずに、ドローンを飛ばすなど、自由な調査ができるのも強みです。

また、SFCの生物の恩恵を目に見えない循環の中でも受けられます。例えば、ゴキブリやアリのような生物は、われわれが出す有機廃棄物を分解し、自然に還す役割を担っています。すでに修繕しましたが、実際、今いるこの研究棟の建物もクロアリに食べられる(シロアリではなく)、自然に還りつつありました。このキャンパスは、常に自然に戻ろうとする強い力、本来の生態系が持つポテンシャルを強く維持している場所です。そうした環境で学べることは

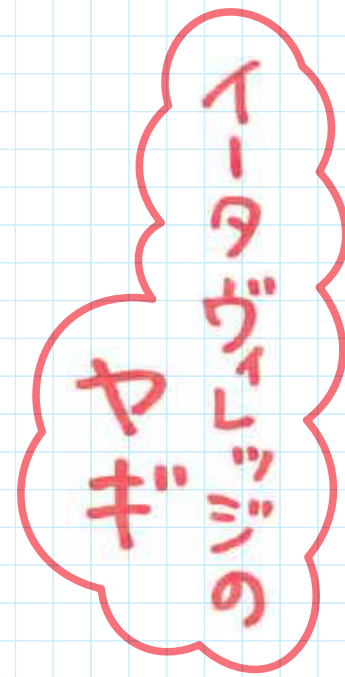
学生にとっても価値があると思います。

●誰よりも先に

—研究を進める上で、最も大切にしていることは何ですか。

「自分が世界初であるかどうか」を常に意識することです。アイデアが浮かんだら、それが過去に誰も考えておらず実行していないかを文献などを通じて徹底的に調べます。そして「これは誰もやっていない、世界で初めてだ」と確信できた時に、初めて、全力で取り組みます。誰よりも先に真理に到達するという気概が、研究者にとって最も重要だと私は考えています。

(構成・吉仲貴紀)



2025年5月、イータヴィレッジに双子のヤギ、マユとカイが入寮した。夏休みを挟み、10月から再び寮に戻ってきている。この2匹のヤギはどのような影響をもたらしているのだろうか。ヤギを迎えるに当たって発足した寮生のチーム「ヤギプロジェクト」から、飯尾美咲さん、ロプレスティみささん、佐藤翼さんにお話を伺った。

●ヤギプロジェクト発足の背景

—ヤギプロジェクトはどのような目的で発足したのでしょうか。

飯尾美咲さん(以下、飯尾)

もともとこのプロジェクトは大きく分けて二つの目的から発足しました。一つ目は、寮内に生い茂る外来種のセイタカアワダチソウの除草です。この植物は毎年約三メートルの高さまで成長するため、対策を講じる必要があります。

二つ目は、寮内での新たな交流創出です。留学生が約三割を占め

るということもあり、国籍や学年を超えた交流がさらに増えれば面白いと考えました。現在ではヤギの世話だけでなく、ヤギ小屋建築やお世話アプリ開発、寮内外でのイベント運営など、メンバーがそれぞれの得意分野を活かすことで、多様な人々が関わる機会が生まれています。

そして三つ目は、SFCと周辺地域の住民との交流創出です。「新事業創造ワークショップ」の授業を通して、藤沢市が取り組んでいる開発にSFCが深く関与していることを知りました。SFCを中

心により良い地域を創っていくには、まず地域の皆さんと学生の距離を近づける必要があると感じています。今年の夏休み期間中に、地域のイベントにヤギたちと参加させていただきました。今後もヤギの周りで自然な交流が生まれていくことを期待しています。

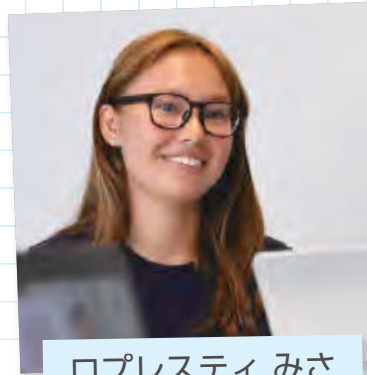
●ヤギが拓くSFCの生態系

—ヤギプロジェクトは、SFCの生態系や地域社会にどのような変化をもたらしていますか。

飯尾 最も直接的な変化は、ヤ



飯尾 美咲



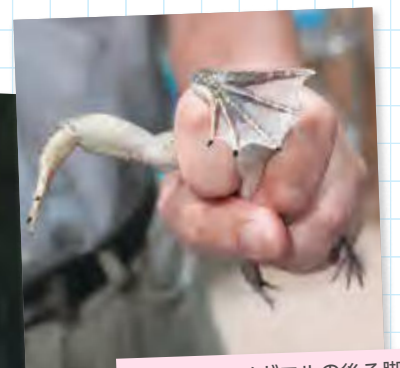
ロプレスティ みさ



佐藤 翼

黒田 裕樹 (くろだ・ひろき)

環境情報学部教授。
専門は、発生生物学。



アフリカツメガエルの後ろ脚。
名前の由来である爪が特徴的

はりセイタカアワダチソウの除草ですね。ヤギたちが草を食べたり踏みつけたりすることによって、この外来種の草は大幅に減少しています。生態系への影響については、メンバーの一人である佐藤翼さんが、ヤギに関してショットガンメタゲノム解析（注1）を進めています。

佐藤翼さん（以下、佐藤）

私は研究の一環で、ヤギに由来する遺伝子資源が周辺地域の都市マイクロバイーム（注2）に与える影響を定量評価しています。これを通じて、ヤギの生息が他の生物にどのような影響を与えるかを調べます。それと同時に、ヤギの唾や毛、フンに含まれる遺伝子が、人間を介し、どのくらいの期間でどの程度キャンパス内や周辺地域まで広がるのかも調査します。ここからは私の主観的な意見ですが、かなりの外来植物がヤギの導入によって減っていると思います。

ます。そのような印象が正しいことをショットガンメタゲノム解析の結果で裏付けたいですね。外来種由来の遺伝子断片の検出割合が減少していることを示し、ヤギ導入による外来種抑制効果が示唆できることが理想です。

●ヤギが広げる学びと変化
——ヤギプロジェクトの実践を通じて、皆さんが得た学びや心の変化はありましたか。

ロプレスティみささん（以下、ロプレスティ）

プロジェクトを立ち上げたばかりの時は、ヤギの飼育に関する専門知識がなかったため、まずは書籍を読み込み、マユとカイがもともと暮らしていた「湘南やぎの里」へ通って実際にお世話をさせていただくことで知識を習得しました。他にも電気柵の仕組みや、ヤギに与えてよいもの・いけないものなどは寮生にも共有する必要があります。

あるため、多言語のポスターやクイズ形式の検定を作りました。こうした一連の作業は、命を預かる責任感から真剣に行いました。

飯尾 柵について言うと、電気柵の外側に竹製の柵もあります。

この竹柵は、キャンパス内に自生する竹を寮生が刈り取って作ったもので、設置作業も自分たちで行いました。竹柵を置いたのは子どもの電気柵接触防止のためでしたが、SFCの自然を活かして生活環境を整える体験ができ、貴重な学びでした。

ロプレスティ 私たちが住むSFCは、昔ながらの里山の風景や季節の変化を身近に感じることができる場所です。夜には星がとて

もきれいに見えますし、寮の玄関では毎年ツバメが巣を作りに来ます。私たちの暮らしが生き物と共にあることを日常的に意識させられるキャンパスなのです。そうし

た環境にヤギを迎え入れたことにより、寮生と自然との新しい関わりの形が生まれたことを実感しています。

飯尾 プロジェクトの活動は、授業での学びとも深く結びついて

います。ロプレスティさんと私は、一ノ瀬友博先生（環境情報学部教授）の「生態学フィールド調査法」を履修し、植生調査の方法や生物の知識を学びました。こうした学びとヤギプロジェクトの経験を結びつけることで、理論と実践の両面から問題意識を深められています。

佐藤 心の変化については、アンケートの結果によると、寮生全

体への影響は大きくありませんでした。しかし、ヤギを見て癒やされたり地域住民との交流のきっかけになったりと、私をはじめとした多くのメンバーが実感できている変化もあります。コアメンバー

の主体性が他の寮生に波及し、新たな挑戦を促す良い事例になっていると考えています。

●続けること以上に大切なこと
——プロジェクト運営における課題と、未来に向けた展望を教えてください。

飯尾

資金調達と組織体制が直近の課題です。クラウドファンディングで一年分の費用は確保しましたが、来年度以降のプロジェクト継続のための資金をどう確保していくかを考える必要があります。ヤギプロジェクトの独自性を活かし、資金調達の様々な方法を模索したいです。また、今の組織には「属人的」な面があります。

そのため、現在のメンバーが退寮した後もプロジェクトが継続していく、あるいは地域の皆さんとの繋がりが残っていく体制を整えようと努めています。上下関係を作らず、寮生が各々の興味を持ち

寄って主体的に活動できるように環境を整えていきたいです。

佐藤 ヤギプロジェクトの目的は、ただ続けることではありません。

ヤギを受け入れることで、私たちの間には様々な繋がりが生まれています。これこそがプロジェクトの核心ではないでしょうか。参加メンバーがヤギプロジェクトの経験を活かし、また新しいプロジェクトに挑戦していくことにも意義があると思います。

飯尾 将来的には、行政や地域の皆さんと連携して、本格的に地域づくりに携わっていきたいという構想があります。一定のハードルはありますが、ヤギの人々を引き寄せる力と寮生の得意分野を組み合わせ、地域に学びを還元していきたいと思っています。また、SFC周辺地域が二〇二四年に市街化区域に編入したことで、まちづくり計画に新たな動きが出てき



飯尾 美咲
(いいお・みさき)

総合政策学部2年。
玉村雅敏研究会所属。

ロプレスティ みさ
(ろぷれすてい・みさ)

総合政策学部2年。
清水唯一朗研究室の日本政治外交ゼミ
(JPD) 所属。

注1 ショットガンメタゲノム解析…

環境中のあらゆる微生物のDNAを網羅的に解析し、その多様な機能や生態を明らかにする手法。
注2 マイクロバイーム…都市環境（空気・土壌・建物など）に存在する微生物群集全体のこと。

佐藤 翼
(さとう・つばさ)

環境情報学部1年。
先端生命科学研究会の腸内細菌
グループ所属。

鴨池とカモ

●カモと共にあるSFC

皆さんは「カモる」という言葉をご存じだろうか。この言葉は、SFCの学生たちの間で、鴨池(別名ガリバー池)のほとりの芝生で

くつろぐことを指して使われている。キャンパスには鴨池の他に三つの遊水池があるが、鴨池は特に重要な意義を持つ。池の正式名称は「2号遊水池」(キャンパス建設時には「B遊水池」といい、洪水時に雨水を一時的に貯めるために設けられた土地であると同時に、SFCの豊かな生態系には欠かせない環境を作り出している。

た。本記事では、鴨池に生息するカモに焦点を当てて、彼らの愛らしい一面と共に、今までなかなか触れられてこなかった「カモがいることで生じる課題」についても触れ、その存在を多角的に捉えたい。

●カモがいる理由

SFCの基本計画と建物の設計を手掛けた建築家の槇文彦氏がこの遊水池を「修景池」と呼んでいることから、この遊水池は景観や人々の憩いを目的として、意図的にキャンパスの中心部に配置されていることが分かる。実際に、鴨池という名の通り池にはカモが生息している。授業の合間や帰り道にカモをのんびり眺めて過ごす学生も多い。本誌のロゴマーク「R」の切り抜き部分にもカモがあしらわれている。その存在はキャンパスに癒やしをもたらし、学生、教員、職員に親しまれてき

キャンパス開設当初(一九九〇年)に四羽のアヒルを譲り受けて、2号遊水池に放したのが鴨池の始まりといわれている。それから、毎年渡り鳥のカモがSFCに飛来して冬を越すようになった。それ以来、カモはキャンパスのシンボルとして、イベントや広報活動にたびたび登場したり、学生のジョークの題材になったりしてきた。そのカモも、渡り鳥であるため、暖かくなるとまた別の場所へ渡って行き、夏頃には数が少なくなる。そのため、夏もカモに鴨池を泳いでほしいという理由から

●生態系の豊かさとかモ

私たち人間の暮らしは「生態系サービス」(生態系によって提供される恵み)によって支えられているという考えがある。そのひとつに、精神的な充足を示す「文化的サービス」という概念があるが、SFCのカモは人々に心理的な癒やしやインスピレーションを与えており、キャンパスでの生活を豊かにする大きな役割を担っている。また、文化的側面だけでなく、カモがキャンパス内を移動しながら排泄することで、キャンパス全体の土壌を肥沃にするといったように、「基盤サービス」の面でも重要である。

●動物と人間の共生

人類は、自らが生き延びるためだけでなく、生活を豊かに彩るためにも、他の動物と関わりを持って暮らしてきた。肉用の牛、愛玩用の犬、観賞用の錦鯉など、野生動物が品種改良された家畜

スが崩れてしまいかもしれないのだ。

●カモが生態系に与える影響

マスコットキャラクターやペットかのようにめだれている鴨池のカモだが、彼らの存在は紛れもなくSFCの生態系の一部でもある。今後カモを見かけることがあつたら、その姿をじっくり観察したり、カモが暮らす環境に目を向けたりしてほしい。

その一方で、人工的にアヒルやアイガモを放すことによる生態系への悪影響も懸念されている。人間が飼育して家畜化したマガモであるアヒルや、一般的に野生のマガモとアヒルの雑種を指すアイガモは、本来の自然界には存在しない生き物である。そのために、生態系への悪影響が指摘されることも少なくない。

カモの場合、渡り鳥のカモは冬

に鴨池に滞在する間につがい形成して、一緒に繁殖地へ渡るといわれている。この時、アヒルやアイガモが鴨池にいるとつがいの形成は難しくなり、渡り鳥のカモが子孫を残す機会が減るらしい。また、雑食性であるカモが一年中鴨池に生息することで、その他の野生動物の食料を横取りすることもあるという。そのため、カモを数匹放つだけで、生態系のバランス

本誌の表紙タイトルロゴの「R」の切り抜き部分がカモの形になったのは、2008年3月発行の36号(特集:総合政策ルネッサンス)から

2010年1月発行の42号では、SFC創設20周年を祝う企画が掲載された。その表紙では、鴨池の写真がカモの形でくり抜かれている

42号「創設20周年記念特別企画:SFCの”問題発見・問題解決”

56号(2014年11月発行)表紙

ロゴの一部がキャラクターとして親しまれるようになった

58号(2015年7月発行)表紙

64号(2017年8月発行)表紙

表紙の写真は鴨池で撮影された

カモ以外のS F Cのシンボルの動物

カモ以外にもS F Cのシンボルとして用いられる動物として、フクロウがいる。しかし、フクロウはカモと違って、実際のフクロウが親しまれているというわけではなく、S F Cの卒業生の比喩としてしばしば用いられてきた。これは、初代総合政策学部長の加藤寛先生が用いた言葉だった。S F Cが、ローマ神話の女神ミネルヴァが住んでいたギリシャ・アテネの「ミネルバの森」に例えられ、また、S F Cの卒業生はミネルヴァが従えるフクロウに例えられた。2019年から2022年には、特設科目として「ミネルバの森（S F C 30周年卒業生連携科目）」が開講されたように、現在もその比喩が親しまれている。

本誌が学生によって編集されるようになったのは2000年10月発行の7号からだが、その号を開くと、卒業生の対談などを掲載する「ミネルバの梟たち」という連載があった。意外にも、2000年頃の本誌にはカモのイラストや鴨池の写真はあまり見当たらなかった。

72号表紙



73号表紙



は、今や私たちの暮らしに欠かせない存在となっている。
カモもその一例である。例えば、農業分野では化学肥料や農薬を用いない有機農法のひとつとして、アイガモ農法が注目されている。水田などでアイガモを飼育することで、農業の妨げとなる雑草や害虫をアイガモが食べ、排泄物が土壌の肥料となるのだ。
動物と人間の関わりは歴史は長く、これからも続いていくだろう。それと同時に、S F Cとカモの間でも続いていくに違いない。その中で、人間が自然に対して思わぬ影響を与えてしまうかもしれないことも忘れてはいけない。
(構成：平野瑠理／藤田叶子)

74号表紙



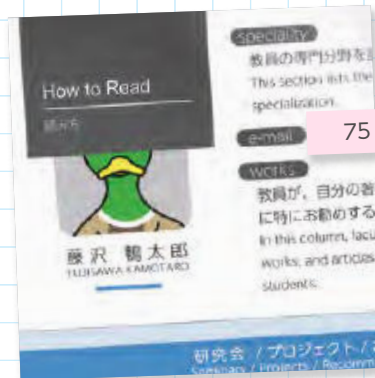
S F Cと「森」

S F Cは開設当初から「森」のコンセプトと共にあった。左ページで紹介している「ミネルバの森」の他にも、S F Cと周辺地域が、藤沢市都市マスタープラン（1999年策定）における拠点のひとつである「健康と文化の森」として位置付けられているという背景がある。特に看護医療学部の校舎があるエリアは「健康の森」として、自然環境を活かした建物の建設がなされた。

2022年には、ORF（オープンリサーチフォーラム）のテーマとして「さあ、森へと戻ろう！ BACK TO THE FOREST」というスローガンが掲げられた。コロナ禍の影響でオンライン開催が前年まで続いたことと、20年ぶりに開催地が都内ではなくS F Cとなったことでこのテーマに決まった。このスローガンには、S F Cらしさとしての自然環境というイメージが色濃く打ち出されているのではないだろうか。

今でこそS F Cの周りの樹林は鬱蒼としていて、S F Cといえば森というイメージがしっくりくるが、開設当初はほとんど樹木が生えていなかったそうだ。S F Cの計画に携わった人々や、開設当初のS F Cを知る人たちは、現在のS F Cの森を見て何を思うだろう。

75号誌面



78号表紙



79号誌面



80号誌面



本誌では、特にコロナ禍以降、カモのイラストがたくさん用いられている傾向にあることが分かった

ナカマが欲しいカモ。



KEIO SFC REVIEW
学生編集員大募集

新入生向けに現在配布している新入部員募集のチラシには「ナカマが欲しいカモ。」のキャッチコピー



慶應S F C学会が発行する学術論文誌『KEIO SFC JOURNAL』では、表紙デザインの公募が行われている。2023年、2024年には「鴨をイラストに含めた、明るい雰囲気を感じられるもの」というテーマで募集された

参考文献

- SD編集部『現代の建築家―横文彦 3（1987-1992）』、鹿島出版会、1994年、137ページ。
- 関口一郎「慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス開設史第3部S F CのQ & A」、2000年< <https://web.sfc.wide.ad.jp/~late4/sfc10/qanda.htm> >（2025年10月9日参照）。

KEIO SFC REVIEW

わたしの推薦図書

西川 葉澄



連載 No.16

私の専門は十九世紀フランス文学なのだが、愛読作品として念頭に浮かぶものが太陽光線の下に朗らかにおすすめできるようなものとはやや(かなり)違う。そんなわけで、今回は現代文学しぼりで、読書に夢中になって降りるべき電車の駅を実際に乗り過ごした作品を中心に紹介したい。

まず最初は、あまり期待せずページをめくったら心が射抜かれたダニー・ラフェリエールの『帰還の謎』(小倉和子訳、藤原書店、二〇一二年)である。メディシス賞をはじめ多くの文学賞を受賞したラフェリエールの代表作となる自伝的小説である。亡命中にニューヨークで客死した父の魂を祖国のハイチに連れ帰る旅行記の体裁を持つ。ラフェリエールはこの作品において、小説の中に俳句のような短い数行の詩句を挿入した独特な文体で新境地を開いた。この文体には彼が文学の師の一人として尊敬する松尾芭蕉の『奥の細道』が代表するような俳文の影響がある。読み始めると、この独特の文体が憑依してくる。つまり、日常生活でラフェリエール風な頭の中で独り言を言いたくなるのだ。村上春樹の小説

を読むと、頭の中で春樹風にマイライフ実況が始まる人は多いと思うが、あれと同じだ。わりと厚めの本だが、「クー」と唸りたくなるようなかっこいい表現に満ちているのでぜひ気軽にページをめくって堪能してほしい。ハイチではブードゥー教(本書ではフランス語でヴードゥ)が人々の生活に深い影響を与えているというが、本書を読むと生活の中で何か事件が起きてもヴードゥの神レグバの仕業として諦めがつくようになるかもしれない。

カレン・ラッセル『狼少女たちの聖ルシー寮』(松田青子訳、河出書房新社、二〇一四年)は書店での完全なジャケ買いだった(かわいいので見てもいい)。後から知ったが、ラッセルは弱冠二十三歳で「ニューヨーカー」誌でデビューし、「天才賞」として知られるマッカーサー・フェローシップ候補にもなったとのこと。彼女の初めての短編集である本書の表題作を読んだ時は、あまりの才能の眩しさに頭の中を強風が吹き抜けた。狼に育てられた少女たちがキリスト教の施設に引き取られて修道女たちに「人間」として育てられる過程が段階を追って描かれる。こ

こで描かれる狼少女とは、ある土地の先住民族あるいは外部からの移民の暗喩と理解されうるが、それだけではなく私たちが子どもの頃に社会適合への躰をされ、成長し、その後も様々な新しい環境に適応する段階で経験することにとっても似ている。群れの中で一足先に成功する姉を妬み、反抗的でどうしようもない妹を土壇場でやはり見捨て、一人前の人間になった後でかつての狼家族を訪問する描写にいちいち辛くなり心が掻き乱される。その他の短編も卓越した想像力で訳のわからない話が描かれる。読後しばらくしてから、「あれは一体なんだったんだろう」と再度ページをめくりたくなるタイプの短編集である。

また、多和田葉子『献灯使』(講談社、二〇一四年)はとてつもないディストピア小説である。近未来の日本を舞台とし、環境の悪化により身体が退化した病弱な曾孫の無名(なんとこれが名前)を健康寿命が伸びた元気がっぱいの百歳越えの老人である義郎が介護して育てる父性愛の物語である。鎖国により外来語の使用や英語学習が禁止され、メディア報道も制限されている恐ろし

い社会が描かれるが、義郎の健気な性格と日本語が変遷した末の変な用語の数々により、ある種のほのぼのしたおかしみが表に出ている。多和田の初期作品から続く、悪い夢からなかなか脱出できないような世界観がここにもあるが、『献灯使』では言葉遊びと造語への意欲が突き抜けている。漢字と外国語を組み合わせた数多の言葉遊びは翻訳が難しいのではと思わせるが、マーガレット・満谷による英訳版が全米図書賞(翻訳文学部門)を受賞して話題となった。多和田は非常に多作の作家であるが、『地球にちりばめられて』(講談社、二〇一八年)、『星に仄めかされて』(講談社、二〇二〇年)、『太陽諸島』(講談社、二〇二二年)で構成される三部作もぜひおすすめしたい。主人公はHiruko(とアルファベットで書かれている)という言語学を専攻する日本人女性で、北欧に留学中に自国が消滅し、自作した人工言語「パンスカ(パン・スカンジナビア言語)」を駆使して北欧で働いている。彼女が様々な若者たちと出逢いながら共に旅をし、日本を目指すという物語である。パンスカで話す設定のHirukoはセリフが全て

直訳形なのも面白いが、母語を同じくしない登場人物が複数の言語で知的に意思疎通し、言語を外側から見ている様が描かれるところが興味深い。多様な設定の若者たちの群像劇でありながら、主人公のHirukoには多和田自身が投影されているのか、Hirukoの言動が『エクソフォニー』等の過去の著作に書かれた言語感覚を彷彿とさせるところがある。物語がどんどん拡散していく三部作をどうやって収束させるのかと思ったが、さすが世界の多和田という終わり方だったので安心して読んでもほしい。

昨年のノーベル文学賞受賞で有名な韓国のハン・ガン『ギリシャ語の時間』(斎藤真理子訳、晶文社、二〇一七年)は至福の読書時間をくれた。『すべての、白いものたちの』(斎藤真理子訳、河出書房新社、二〇二三年)も詩的なイメージが素晴らしいかったが、『ギリシャ語の時間』では、まるでノイズキャンセリング機能付きのヘッドセットをすっぽりかぶったように物語世界に深く没頭させられた。それぞれの悲劇の中を生き続け、それぞれに傷ついた登場人物たちが、夜のギリシャ語の

クラスですれ違い、階段を踏み外してメガネを壊したり、意思疎通のために人の手のひらに指で字を書く。立ち上がれないくらい弱っているが、それでも計り知れない力を秘めているように見える主人公のように、私も静かな街を朝まで夜通し歩きたい気分になされた。この小説の舞台は韓国のどの街なのだろうか。

最後にピエール・バイヤールの『読んでいない本について堂々と語る方法』(大浦康介訳、ちくま学芸文庫、二〇一六年)を紹介したい。著者は精神分析医かつ有名な文学研究者であり、フランスのみならず英語圏でもベストセラーとなった有名な本だが、露悪的なタイトルと知的エリートだけに許される遊戯に満ちた内容で、何回読んでも読んだ気がしない。読書とはどういうことなのかを問い、完全な読みは存在せず、読むことが理解することと等価なのではないことを主張している。本書が指摘するように、私もささやかなブックレビューを書くにあたって、読んだ本に関する記憶は多くの場合不確かであり、本に関して語るのとは自分について語ることである、ということ

は確認できた(念のため書いておくが、私が上記で紹介した本は全て「読んだ」ものである)。



西川 葉澄

(にしかわ・はすみ)

総合政策学部専任講師。

専門は、フランス文学、フランス語教育、ケベック文学。

TANASAI REVIEW

KEIO SFC REVIEW編集部は「TANASAI REVIEW」として今回の七夕祭に参加。
過去号の一斉展示、アンケート企画を実施し、読者の方々との貴重な交流の場となった。

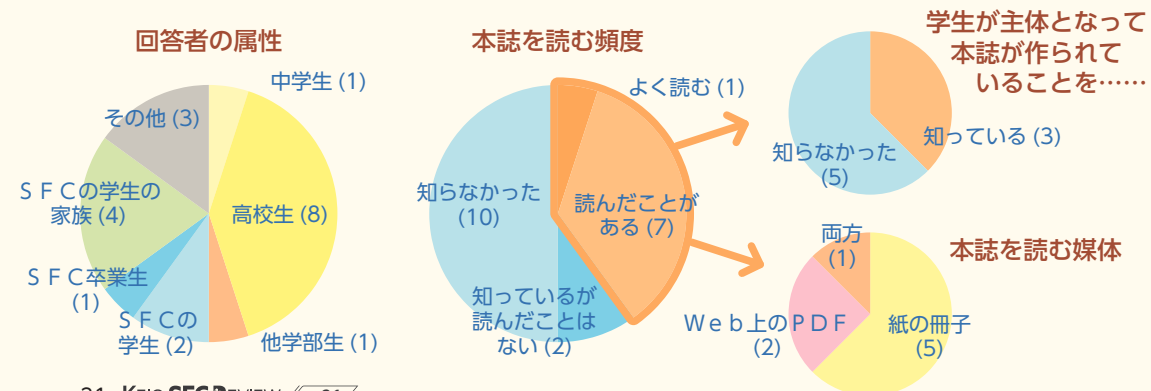
編集部として2年ぶりの参加となった今回の「TANASAI REVIEW」では、学生主体での制作が始まった7号(2000年10月発行)から、最新号(当時)の79号(2025年3月発行)までの一斉展示を実施しました。教室の壁一面に並んだ数々の表紙を見て、編集部一同、KEIO SFC REVIEW がたどってきた道のりの長さを実感しました。既刊号の中には、すでに配布が終了している号が多く、古い号になると、Web公開が行われていないものがほとんどです。また、七夕祭後の7月末に発行した80号の特集テーマは「紙」。読者の方に、紙媒体としての本誌を手にとって読むことができる機会を作りたいという思いが、今回の七夕祭での企画に繋がりました。他にも、読みたい特集テーマを書いた短冊を竹に吊るしてもらったり、Webフォームでのアンケートを実施したりと、読者の方との交流の場を作れるような企画を行いました。



当日は予想以上に多くの方にご来場いただきました。SFCの歴史を感じさせる約70冊がずらりと並ぶ中、誌面をじっくりと見てくださっていた姿が印象に残っています。われわれ編集部員にとって、読者の方が冊子を手取る瞬間を目の前にする機会はなかなかありません。来場者の方と直接お話しし、自分たちの作った冊子がどのような形で届いているのかを知った貴重な時間でした。

中高生からSFCの卒業生まで、実に様々な方が展示を訪れてくださいましたが、その中には、KEIO SFC REVIEWの存在を知らなかった方も多くいらっしゃいました。知名度向上はこれからの課題でもあります。 「TANASAI REVIEW」は皆さんに本誌を知ってもらいたいという思いがけとなったのではないかと考えます。アンケートでも、読者の方が読みたいテーマや興味を持った記事・特集内容など、普段聞くことのない生の声を受け取ることができました。

Web フォームアンケート結果 (一部抜粋)



二つのステージで多くの団体がパフォーマンスを行った▲

ステージ
企画

テント
企画



▲様々な研究会やサークルが参加。編集部員もわたあめを食べた



縁日
企画

▲鴨池とメディアセンターの間に屋台が並ぶ。真剣な様子の子どもたち



シータ館にはステンドグラスを模した装飾が。今年もたくさんの人が浴衣を着ていた▲



夢短冊
企画

七夕祭の会場に入ると盆踊りのやぐらが来場者を迎える▲



夢が書かれた短冊がキャンパス中ではためく▲



1日目の夜。恒例の打ち上げ花火が今年もSFCの夜空を彩った▼

花火
企画



七夕祭取材記

2025.7.5-2025.7.6

毎年七月頃にSFCで開催される学園祭。地域のお祭りという側面も有し、在校生のみならず、卒業生や地域の住民なども多く訪れる。第三十六回のテーマは「葉」。

編集後記

慶應SFC学会

発行人 黒田 裕樹（会長 / 環境情報学部教授）
担当理事 宮代 康文（総合政策学部准教授）
事務局 田坂 真美

編集長 藤田 叶子（総合政策学部 4 年）

副編集長 岡田 奈和実（総合政策学部 2 年）
 服部 琴夏（総合政策学部 1 年）

編集委員 深町 優雨（総合政策学部 4 年）
 石田 百花（総合政策学部 3 年）
 平野 瑠理（総合政策学部 3 年）
 松本 こころ（総合政策学部 3 年）
 吉松 野乃子（総合政策学部 3 年）
 井庭 晴香（環境情報学部 3 年）
 藤井 美来（環境情報学部 3 年）
 宮田 智華（総合政策学部 2 年）
 吉仲 真紀（環境情報学部 2 年）
 高坂 真優佳（総合政策学部 1 年）
 宮野 真陽（総合政策学部 1 年）

表紙 / 誌面デザイン

藤田 叶子（総合政策学部 4 年）

取材記デザイン

岡田 奈和実（総合政策学部 2 年）

今号の特集「SFCのいきもの」は、今年7月の七夕祭で実施した読者アンケートがきっかけとなって企画が始まりました。SFCに暮らす動物についての特集を読みたいと何人かが回答してくれたのです。

在学生にとってSFCの自然豊かな環境は身近なものです。ほとんどの学生にとってそれは学生生活の背景にすぎないのではないのでしょうか。卒業を半年後に控える私もその一人でしたが、今号の制作を経て少し世界が変わって見えるようになりました。これまで認識していなかった生物の姿が目飛び込んでくるようになり、季節の移り変わりが鮮やかに感じられました。

インタビューを通して私たち編集委員が学んだことは多く、それと同時に生物に関する学問の世界の広大さを知りました。本号のノート風のデザインは、編集部が学びながら作り上げた、未完成の観察ノートをイメージしています。企画の実現にお力添えいただきましたーノ瀬研究会、黒田研究会の皆様には感謝してもしきれません。

読者の皆様も、今後SFCを訪れる際には、ぜひその季節にしか見られない自然を堪能してみてください。

2025.10.30 編集長 藤田叶子

発行日 2025 年 11 月 20 日
発行所 慶應SFC学会
 〒 252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322
 0466-49-3437
<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>
keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp

無断転載・複製を禁じます。ご相談は慶應SFC学会までお寄せください。

本誌80号「紙で残す」の記事で、メディアセンターの建物（ミュージアム）が完成する前の1990年には資料が「体育館」に保管されていたとあるのは「シグマ館」の誤りでした。訂正して、お詫びいたします。



こちら (<https://gakkai.sfc.keio.ac.jp/review/jp/>) から一部のバックナンバーをご覧いただけます。

KEIO **SFC** REVIEW No. 81

ISSN 1343-3318

発行所 / 慶應SFC学会

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>